国語

〈注　意〉

1 問題は **1** から **5** までで、17ページにわたって印刷してあります。

2 検査時間は**五〇**分で、終わりは**午前九時五〇**分です。

3 声を出して読んではいけません。

4 答えは全て解答用紙に**ＨＢ又はＢの鉛筆（シャープペンシルも可）**を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**

5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。**

6 答えは解答用紙の決められた欄から**はみ出さないように書きなさい。**

7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。

8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい。**

9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 懸垂を日課として体を鍛える。

(2) 既卒の者を対象とした会合に参加する。

(3) 網目が粗いセーターを着ている。

(4) 接客には如才ない対応が求められる。

(5) 家系には官吏として国に仕えた人がいる。

---

2 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 芝居のジョマクが始まる。

(2) トウジに行って療養する。

(3) 食後に整腸剤のガンヤクを服用する。

(4) 議長の大役をウケタマワる。

(5) キュウタイに依存していては発展しない。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

魚住がくるりと傘を回した。

「そうだ、雨がやんだ後、虹が出たんだよ。かなりでかいやつ。こう、川をまたぐ感じで。」

腕をななめ上に伸ばし、傘の先で宙に弧を描いてみせる。

「めちゃくちゃきれいだった。」

「へえ。珍しいな、冬の虹って。」

「そっか、確かに。普通、夏の夕立の後とかだよね。」

ラッキー、と魚住はうれしそうに笑った。

「おれ、子どものとき、虹の上に座ってみたかったんだよ。って、徳井さんに言ったことあったっけ？」

「ないな。」

初耳だった。(1)魚住らしいといえば、魚住らしいが。

「座り心地よさそうじゃない？　眺めもすごそうだし。でも親父には、また夢みたいなことばっかり言って、ってばかにされて。あれも傷ついたね。ま、それでもめげなかったから、こうして今ここにいるわけだけど。」

「気持ちいいだろうな。虹に座れたら。」

七色のアーチのてっぺんに腰かけ、愉快そうに両脚をぶらぶらさせている魚住の姿が目に浮かぶ。その隣に座ったら、どんな景色が見えるのだろう。

(2)深呼吸をひとつしてから、徳井は口を開いた。

「おれ、断るよ。」

魚住がだしぬけに立ちどまった。半歩先に出た徳井も足をとめ、後ろを振り向いた。薄暗い道の真ん中で、ふたり向かいあう。

「どうして？」

魚住が言った。さっきまでとは一変して、声も表情もこわばっている。

「おれのことは気にしないでって言ってるのに……。」

「気にしてない。」

徳井はさえぎった。

「魚住のせいじゃない。おれが、そうしたいんだ。これからも魚住とふたりで、椅子を作りたい。」

徳井が椅子を作るのは、楽しいからだ。魚住と一緒に椅子を作るのが、楽しいからだ。

＊胡桃にも指摘されたとおり、徳井も魚住も、まだ一人前の職人とはいえない。未熟なふたりだけで工房を運営していくのは、確かに大変だろう。でも、やってみたい。少しずつでも前に進んでいけばいい。魚住の苦手とする細かい加工を、辛抱強く教えよう。なるべく計画どおりに作業を進めていけるよう、工程管理も徹底しよう。反対に、顧客の開拓やら接客やら、徳井のほうが魚住から学ばなければならないこともあるだろう。

そうして地道に経験を重ねていけば、いつかは虹に座れるかもしれない。ふたり並んで晴れやかな気持ちで世界を見渡せる日が、来るかもしれない。

「いい椅子を作ろう。魚住とおれ、ふたりで。」

魚住は身じろぎもせずに、徳井の顔をまじまじと凝視している。徳井も目をそらさなかった。そらすつもりはなかった。

先に動いたのは、魚住だった。

「好きにすれば。」

(3)徳井の横をすり抜けて、小学生みたいに傘を振り回しながら、道の先へと歩き出す。

魚は一匹も釣れない。

「おかしいなあ。こないだ胡桃と来たときは大漁だったのに。」
魚住は横でぶつくさ言っている。お前のせいだとばかりに恨めしげなまなざしを向けられて、徳井は反撃を試みた。
「餌のせいじゃないか？」
魚住は生餌（いきえ）の入った容器をさも気味悪そうに一瞥（いちべつ）し、徳井の顔に視線を戻した。
「前は、胡桃がやってくれたんだよな。」
「甘えない、頼らない、投げ出さない。」
徳井はすかさず切り返した。魚住がそっぽを向く。
(4) 甘えない。頼らない。投げ出さない。*あの雪の日、これからも力を合わせてやっていこうと約束したときに、魚住はこの三つを虹にかけて誓ったのだった。ちなみに、徳井にも徳井の三か条――あせらない、考えすぎない、他人のせいにしない――がある。
進藤（*しんどう）には徳井から断りの電話を入れた。考え直すように説得されると身がまえていたのに、残念です、また気が向いたらいつでも連絡下さいね、とさらりと言われただけで、やや拍子抜けしてしまった。
拍子抜けしたといえば、進藤の下で働くべきだと主張していた胡桃も、ことさらに反対はしなかった。まあ結局こうなるような気がしてました、とあきらめたようにため息をついたきりだった。*じいちゃんもまた似たようなもので、そうか、律（*りつ）のしたいようにしろ、と淡白な反応だった。
唯一驚いてくれたのは、菜摘（*なつみ）だ。ほんとにいいの、わたしはうれしいけど、でもほんとにいいの、と何度も繰り返していた。
「ん？　でも、徳井さんは生餌だけど全然釣れてなくない？」
今度は徳井が黙る番だった。
「まいったな。今晩は魚尽くしになるからよろしくって、なっちゃんにも言っちゃったのに。」

「なんでお前はそうやって、ほいほい安請けあいするんだよ？」
「目標は高く持ったほうがいいでしょ？」
「目標じゃなくて妄想だろ。」
「妄想はひどくない？　せめて夢って言って。」
あれから三ヵ月、それぞれの三か条を守りきれているとはいえない。
魚住は難しい細工を手がけるたびに弱音を吐いているし、徳井は注文の入らない日がしばらく続くと憂鬱になってくる。お互いに文句を言ったり言われたり、小さなけんかもしょっちゅうある。
ただし魚住は徳井に「これやって」ではなく「これ教えて」と頼むようになった。徳井は魚住のデザイン画を見せてもらうときに、以前より時間をかけて細部までじっくり確認するようになった。納期はふたりでみっちりと相談して決めるようにもなった。
むろん、うまくいかないときもある。けっこうある。
徳井が懇切丁寧に教えているのに魚住がコツをのみこめず、ちゃんと話を聞けよ、だって教えかたがわかりにくいんだもん、と押し問答になることがある。徳井の提案した装飾を、ださい、と魚住が無情にも一蹴することもある。余裕を持って作業を進めているはずなのに、なぜか納期の直前には必ず異様に忙しくなる。
「ねえ、あのおじいちゃんたちは釣れてるっぽくない？」
堤防の先に陣どっている釣り人たちをうらやましげに見やり、魚住がひそひそと言う。
「みたいだな。」
「ちょっと聞いてみよっか、どうやったら釣れますかって。うまくしたら、魚も分けてくれるかもしれないし。」
「やめとけよ。」
若い者が平日の昼間からなにをぶらぶら遊んでるんだ、と眉をひそめられそうだ。徳井たちがゆうべ徹夜で椅子を数脚しあげ、さっき納品し

てきたばかりなのだと、彼らは知る由もない。

「じゃ、行ってくる。おれの竿も見ててね。」

徳井の反対をまるきり無視して、魚住が腰を上げた。堤防の上をすたすたと歩いていく。

徳井は大きなあくびをひとつもらした。うんと伸びをして、竿の先へと目を戻す。(5)ふたつ仲よく並んだうきが、かすかな波にゆらりゆらりと揺れている。

（瀧羽麻子「虹にすわる」による）

〔注〕胡桃――魚住が以前勤めていた工房の娘。

あの雪の日――雨がやんだ後に虹が出た日と同日。雨の前には激しい雪が降っていた。

進藤――魚住が憧れている著名な建築家。

じいちゃん――徳井の祖父。

律――徳井の名。

菜摘――徳井の同級生で、徳井や魚住が通う食堂の娘。魚住からは「なっちゃん」と呼ばれている。胡桃と共に徳井や魚住の仕事を気にかけている。

〔問1〕(1)魚住らしいといえば、魚住らしいが。とあるが、徳井が捉えている魚住の人柄とはどのようなものか。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　とてもかないそうにないことであっても楽観的に捉え、何とかなることを期待して前に進んでいく無邪気な人。

イ　現実世界の厳しさに目を向けようとせず、いつも理想ばかりを口にしながらも具体的な努力をしない軽薄な人。

ウ　困難なことでもできると信じて進む姿で周囲を魅了する求心力はあるが、実際はあてもなく行動している無責任な人。

エ　他者から自分の甘さを指摘されても意に介さず、現実離れしたことにも果敢に挑戦しようとしている大胆な人。

〔問2〕(2) 深呼吸をひとつしてから、徳井は口を開いた。とあるが、このときの徳井の様子を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　虹に座るという幻想的な話から、椅子作りという現実的な話に切り替えるため、間をとって浮かれた気持ちを静めている。

イ　これからも工房を続けるのは、魚住と一緒に椅子作りをするのが楽しいからだと改めて告げるのは恥ずかしく、緊張している。

ウ　どこにも行かず、これからも魚住と椅子作りの工房を続けていくことを魚住に告げる前に、自分自身でその決心を確認している。

エ　自分たちの工房で椅子作りを続けるという決断を、魚住に否定されるのではないかと心配し、言い出すのをためらっている。

〔問3〕(3) 徳井の横をすり抜けて、小学生みたいに傘を振り回しながら、道の先へと歩き出す。とあるが、このときの魚住の様子を説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　徳井が他ならぬ自分と一緒に椅子を作りたいと言ったことは全くの予想外だったが、徳井が本気であることを悟るとうれしくてたまらず、喜びで気持ちが高揚している。

イ　徳井は自分と一緒に椅子を作りたいと言ってくれたが、自分の存在が徳井にそのような発言をさせてしまったことを悟り、自分自身が情けなく投げやりになっている。

ウ　徳井が自分と一緒に工房を続けると決心してくれたことを喜ぶには複雑な思いを抱いたが、徳井が改めて自分を選んでくれたことにうれしさを隠しきれないでいる。

エ　徳井が自分と一緒に工房を続けると決めたのは、自分のことを気遣ったからだと思い、他人行儀な遠慮をする徳井に対して生じたいらだちを抑えようとしている。

〔問4〕(4)甘えない。頼らない。投げ出さない。とあるが、この誓いを立てた後の魚住の様子を次のようにまとめたとき、□に入る適切な表現を、本文の内容を踏まえて**三十字以内**で書け。なお、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

魚住は三つの誓いを意識して、□ようになった。

〔問5〕(5)ふたつ仲よく並んだうきが、かすかな波にゆらりゆらりと揺れている。とあるが、この表現について説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　平日の昼間から釣りに来ている徳井と魚住のうきが、かすかな波にも揺れている様子は、二人の椅子作りの仕事は注文が入らなかったり忙しくなったりと安定していないものであることを強調している。

イ　他の釣り人たちが釣れている一方、まだ何も釣れていないのに並んで穏やかに揺れているふたつのうきは、未熟ながらも自分たちのペースで工房を運営していこうという徳井と魚住の希望を象徴している。

ウ　水面のかすかな波は、工房の運営には徳井と魚住のいさかいが絶えないことを表しているが、同調して揺れているうきは、それでも二人が良きパートナーとして困難を克服していく様子を表現している。

エ　仲よく並んでいても波につられて揺れているうきは、徳井の反対に耳を貸さずに魚住が老人たちのもとに行ってしまったように、いずれは一人前の椅子職人として二人が独立していく運命を暗示している。

このページには問題がありません。

4 次の**文章1**と**文章2**を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔**注**〕がある。）

文章1

深い思考を行なうためには、やはりベースになる経験が不可欠です。幼児よりも大人のほうが深く思考ができるのは、そのためです。イギリス経験論の完成者とされる哲学者ジョン・ロック（1632～1704年）は、経験の重要性について「タブラ・ラサ」という概念を用いて説明しました。

タブラ・ラサとは、心のなかの白紙とも言うべき存在であり、人間は物事を経験するたびにそこに観念を書き込んでいくと唱えたのです。これが、彼の言う「経験主義」です。もともと生まれ持った観念が存在するという「合理論」という立場もありますが、経験主義が的を射ていることは、みなさんの経験からも明らかなのではないでしょうか。誰しも経験によって強く賢くなっていくわけですから。

そこで哲学をするためにも、つまりＡＩに負けない思考ができるようになるためにも、経験値を上げる必要があります。ＡＩは瞬時にあらゆるデータベースにアクセスし、あらゆる情報を集めてきますから、経験は不要です。ところが、人間は経験がないと情報を得ることができません。本で情報を得るにしても、それは読書経験という経験です。

これではＡＩにはかなわないように思えますが、そうではありません。ＡＩの場合、必要な情報しか得ようとしません。関連する情報も参照するでしょうが、それはキーワードが関係しているなど、非常に形式的な関連性です。

これに対して、人間の場合、たとえば山にクワガタを捕りに行った際、さまざまなものに目を向けます。山の景色、野に咲く花、自然の匂い、道端で出会う農家の人、途中で食べたおにぎり、その山道を歩く疲れ……。あらゆるものが、クワガタを捕りに行った際の経験になっているのです。

これらは、ＡＩがたとえ地球の裏側にあるサーバーに情報を取りに行っても得られるものではありません。彼らはどこに行こうと、形式的に目的に関連する情報しか引っ張ってきませんから。ここに人間の経験の特徴・強みがあると言っていいでしょう。

さらに、人間の経験には＊バイアスがかかります。感情を持った人間という存在は、経験した事実をそのまま受け取ることはできないのです。ましてや時間が経てば、それは意味を変えてしまうものなのです。

山にクワガタを捕りに行った経験は、人によって意味が異なります。同じ場所に同じ時に行っても、そこにはじめて行った少年と、何度も通っているクワガタ捕り名人の大人では、まったく違う経験をしていることになるのです。なぜなら、経験とは主観的なものだからです。

それは、彼らに感想を聞けばすぐにわかります。何がよかったか、何が悪かったか、何を得たか、というように。この主観がバイアスをかけるわけです。これはいいか悪いかではありません。ＡＩとの違いです。そして時間が経てば、同じ人でも経験の意味を変えてしまいます。人間は、記憶をそのまま維持できる生きものではないからです。

そもそも記憶は、それを思い出すごとに頭のなかで再生産されているもの。したがって、ひとつの経験は刻一刻、意味を変えていると言ってもいいでしょう。ＡＩにはそのようなことはありえません。同じ事実についての情報を、1年前のものと10年前のものと2種類集めることは可能でしょうが、それらを混ぜてひとつにしてしまうことはできないのです。

(1) このように、人間にとっての経験はＡＩが取得してくる情報とはまったく質が異なり、人間はこの経験をデータベースにして、思考を行ないます。

時に、それをあたかも事実であるかのごとくとらえて、創造を行なう。だから、人間の思考はユニークなのです。そして、そんなデータベースとなる経験が多ければ多いほど、強烈であれば強烈なほど、思考のユニークさも増していきます。哲学するために経験値を上げる必要があるのはそうした理由からです。

結局、ＡＩがどれだけ進化しようと、人間は思考力で勝負するしかありません。ＡＩが賢いからといって、人間は体力で勝負というわけにはいかないでしょう。体力だってロボットには負けますから。感情は負けないかもしれませんが、感情で何ができるかです。感情と思考は簡単に切り離せるものではないので、感情を生かした形での思考力を武器にすべきでしょう。

パ*スカルが言うように、人間は考える葦（あし）です。その栄誉は、ＡＩの登場によって簡単に捨てるべきではありません。これまでも、そしてこれからもずっと考える葦でいけばいいのです。

葦は、風が吹けばポキリと折れるようなとても弱い植物です。人間もまたそんな弱い存在なのです。ちょっとしたことですぐにへこみますし、何より生身です。自然にも勝てません。ところが、考えるという点においてはとてつもなく強い。これが、パスカルの言いたかったことです。

この理屈は、ＡＩ時代には大きな意味を持ってきます。なぜなら、ＡＩと比較して人間は弱く、感情を持った人間は機械とは違ってセンシティブです。逆に、そこをうまく生かせばいいのです。

(2) 一言で言うと、人間は弱さを武器にできる生きものだということです。弱さで武装するとは矛盾しているようですが、そうとも言えません。前述のパスカルはまた「幾何学の精神と繊細の精神が必要だ」と言っていますが、これは合理的思考と感情のふたつがあってはじめて強靭（きょうじん）な思考と言えるということです。少なくとも、私はそのように理解しています。

だから、弱さと強さが両方あってはじめて、思考力は武器になる。特に人間のことや人間社会のことを考える時に、弱さのわからない人には本当に正しい答えは導き出せません。これはＡＩにも当てはまることです。ＡＩが真の弱さを理解しない限り、ＡＩが人間の求めるものを提供するのは不可能でしょう。効率のいい投資のしかたや、ベストな健康法を教えてはくれても、はたして本当に幸せになるための生き方を教えられるかどうかということです。

（小川仁志「ＡＩに勝てるのは哲学だけだ」（一部改変）による）

文章２

正直、テキストから感情を理解するのは非常に困難です。もちろん、「すごい!!!」といったびっくりマークがたくさんついていれば「驚きかな？」と思ったり、「いいね」などのポジティブな表現があれば「幸福かな？」と思えるのですが、テキストによる発話の多くはその感情の推測が難しいものです。「そうですね」の一言を取っても、楽しそうに言ったり悲しそうに言ったりすることが容易なように、感情が文章の字面（じづら）だけから分かることは少なく、どちらかと言えばその言い方に現れます。

(3) よって、音声や身振り手振り、表情を用いた感情理解の研究が盛んに行われています。

感情の自動分類をする場合、問題はデータを準備するのが難しいことです。一般に分類を行う際は、データを準備してそれにラベルを付与して、データからそのラベルを当てる工程を経ますが、特定の感情が会話になかなか現れないといったことが多くあります。そもそも常日頃からそんなに感情ばかりを表出している人はいません。泣いたり笑ったりを繰り返していては疲れてしまうでしょう。よって、あまり発露しない感

情を集めてデータセットにするのが大変なのです。そこで、俳優を雇って、特定の感情を表現してもらってデータを作ることが多くありますが、それだと自然な発話になりません。また、感情は明らかなものばかりではなく、文脈から推し量る必要があるものも多くあります。そういったデータは集めにくく、推定も難しくなります。理想的には、「顔では笑っているけれど心で泣いてるな」といったことを当てる技術を作りたいのですが、その実現にはもう少し時間がかかりそうです。

ところで、感情理解はコールセンタでも活用されています。コールセンタに電話をすると、「この音声は録音されています」といったアナウンスが流れると思いますが、これはこの音声を後で人間が聞いたり、コンピュータで解析するため。そして、コンピュータで解析される用途の一つはクレームの抽出です。つまり、お客さまが怒っている通話を見つけることです。あきらかに怒っているお客さまの場合は声の大きさや音声の特徴から見つけやすいのですが、怒りを爆発させずに怒るお客さまも多くいます。こうした静かな怒りをコールドアンガーというのですが、実は、そうした怒りは音声からだけでは検出することができません。一般に、相手が静かに怒り出すと、オペレータが相槌(あいづち)しか打たなくなってしまいます。また、対話の間がぎこちなくなってしまいます。コールドアンガーはそのような対話の特徴から見つけることができます。

感情理解の目的の一つは共感にあるといっても過言ではありません。共感なくして、信頼は生まれません。[4] ここでは雑談[*]ＡＩにおける共感について触れておきたいと思います。

人間にとって共感は非常に重要で、人間同士の雑談のデータを収録して発話意図のラベルを付与したところ、共感・同意という発話意図のラベルは全体の12％もありました。つまり、８回に１回ほど同意や共感を示していることになります。これは大変多いのではないでしょうか。

共感的にふるまうロボットは、より信頼を得られることが知られています。ゲームなどで相手となる対話システムでは、共感をすることでより相手に信じてもらいやすくなることが示されています。私たちの研究グループでも雑談ＡＩにおける共感の影響について調査をしています。たとえば、好きな動物・嫌いな動物についての雑談を行うシステムを作ったことがあります。このシステムでは、共感を行う頻度をコントロールできるようにしてありました。そして、全然共感しないシステムや少し共感するシステム、かなり共感するシステムなどを作り、共感した回数とユーザの行動や対話の満足度の関係を調べました。

ある設定のシステムは、ユーザが「猫が好きです」と言ったのに、「私は猫が嫌いです」と言ったりします。別の設定のシステムでは、同じようなユーザの発話に対して「分かります。私も猫が好きです」と言ったりします。すると、共感するシステムのほうがユーザの満足度が高い結果に。また、面白いことに、システムの共感の回数が多いほどユーザの共感の回数が多い傾向が見られました。つまり、システムが共感をすればするほど、ユーザも共感する傾向にあったのです。共感するということは、少なくとも相手を気に掛ける、相手がどう思っているのかを考えるということです。共感することにより、ユーザからのそうした行動を引き出しうることは、ユーザとの信頼関係を築く上で、極めて重要な結果です。

私たちが作った別の共感を行う雑談ＡＩは、自身のエピソードを持っており、それに基づいて相手に共感を示します。旅行についての雑談を行うのですが、ユーザが「清水寺を見て京都が楽しかった」という内容の発言をすると、自身のエピソードに似た内容がないかを探します。そして、たとえば「銀閣寺を見て京都を楽しんだ」というエピソードが

あったとすると、「私も京都に行きました。銀閣寺を見たのですが楽しかったです」といった応答ができます。(5)これは、単に同意や共感を示しているだけではなく、自身の経験に裏打ちされた共感です。このようにエピソードを持たせることによって、共感をより深いものにすることが可能です。

ただ、気を付けなくてはいけないのはロボットや対話システムに本当に共感ができるのかという点。ここは対話研究者の中でもよく話題に上ります。たとえば、雑談ＡＩが「コーヒーが好きです」と言ったとして、システムはコーヒーが飲めないわけです。なので、どうしても嘘（うそ）っぽくなってしまいます。「京都に行ったのですが清水寺がきれいでした」と言っても、「ほんとかよ？」となります。こういう問題を、発話が誰のものかという意味で、発話の帰属の問題と言ったりします。発話の帰属の問題があるために現状の雑談ＡＩでは真の意味で共感ができていると言えないでしょう。

（東中竜一郎「ＡＩの雑談力」による）

〔注〕バイアス――偏り。
パスカル――フランスの哲学者、数学者、天文学者。
雑談ＡＩ――人間と自然な雑談ができることを目的に研究、開発されているＡＩ。

〔問１〕(1)このように、人間にとっての経験はＡＩが取得してくる情報とはまったく質が異なり、人間はこの経験をデータベースにして、思考を行ないます。とあるが、「ＡＩが取得してくる情報」と「人間にとっての経験」の違いについて説明したものとして、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　ＡＩから瞬時に得られる情報は、データベースの中でも常に最新のものであるが、人間の経験は、一つの行動に付随する複数の意味を含み、記憶の忘却につれて経験した当初の意味も変わっていくものである。

イ　ＡＩの扱う情報は、過去をさかのぼりながら異なる複数のものを集めてくることで成り立っているが、人間の経験は、同じ人が同じことをしても、そのときの気分で常に異なる意味を作り出していくものである。

ウ　ＡＩが取ってくる情報は、サーバーの遠い近いに関係なく、その内容には偏りがないが、人間の経験は、経験した回数や経験する人の年齢によって、記憶として意味づけられることに偏りがあるものである。

エ　ＡＩが引き出す情報は、いつでもデータベースの中で条件に当てはまるものだけであるが、人間の経験は、様々なものが複合的に重なった個別的なものであり、時間の経過とともに意味が変化していくものである。

〔問2〕(2) 一言で言うと、人間は弱さを武器にできる生きものだということです。とあるが、「人間は弱さを武器にできる生きもの」とはどういうことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　人間は物事を道理にのっとって考えるだけではなく、繊細な感情を発揮することで、ＡＩに対抗できる思考ができるようになるということ。

イ　人間は精神的な繊細さに欠ける存在であることを自覚することで、ＡＩには不可能な、ユニークな思考ができるようになるということ。

ウ　人間は取るに足らないことで気分が変動することがあるが、それゆえに、ＡＩが配慮しない相手の気持ちを思いやる繊細さがあるということ。

エ　人間は感情を大切にして物事を考えるので、ＡＩのような形式的な解答ではなく、真に幸せになる生き方を提案できるようになるということ。

〔問3〕(3) よって、音声や身振り手振り、表情を用いた感情理解の研究が盛んに行われています。とあるが、筆者がここで「感情理解の研究」を紹介する意図は何か。最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　テキストの解析だけでは感情を読み取ることは難しく、話し言葉や動作で人は感情を表現していることを説明して、機械が感情を理解するには人と自然な会話ができる技術が必要であることを示すため。

イ　日常的に喜怒哀楽が明確な人は少なく、表情とは裏腹の感情を抱く人もいるが、そうした複雑な感情をその場の雰囲気から感じ取れる人間の能力は、機械にはまねできないということを示すため。

ウ　静かな怒りなどの感情は、怒っている本人の会話だけでは分かりにくく、対応している相手の様子から判断できるので、客観的に人の会話を解析する機械が必要になっているという現状を示すため。

エ　人の日常の自然な会話の中や表情には現れず、その場の流れの中から察する感情があるので、人の感情をデータ化し、機械が分類や理解をするにはまだ課題が多いということを示すため。

〔問4〕(4) 共感なくして、信頼は生まれません。とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか、その理由を**文章2**の本文中のこの文以降の語句を用いて**四十五字以内**で書け。なお、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問5〕(5) これは、単に同意や共感を示しているだけではなく、自身の経験に裏打ちされた共感です。とあるが、「自身の経験に裏打ちされた共感」について次のようにまとめるとき、［　A　］、［　B　］に当てはまる最も適切な言葉を、それぞれ**文章1**の本文中から、［　A　］は**二字**、［　B　］は**十七字**で探し、そのまま抜き出して書け。

文章2の筆者は、自身の経験に裏打ちされた共感が相手から信頼を得るには重要だと述べている。この主旨は**文章1**の筆者が、経験値を上げて、［　A　］を理解して［　B　］ことが必要だと言っていることに当てはまる。

〔問6〕 **文章1**と**文章2**を読んだ生徒たちが、人間とＡＩが共存する様子について話をしている。**文章1**と**文章2**の主張や生徒Ａ～Ｅの会話を踏まえて、将来、ＡＩが発達した社会で人間が果たすべき役割について、あなたの考えを**二百字以内**で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

生徒Ａ　将棋やチェスの世界ではＡＩが人間に勝てるようになって、ＡＩの能力が優れていることが実証されているよね。

生徒Ｂ　だけど、本文でも言っているけど、感情を理解するとか経験をもとに話すとかは無理でしょう。これらはやっぱり人間独自の能力だと思うよ。

生徒Ｃ　でも、それはＡＩが蓄積するデータによるんじゃない。たとえば京都に行った人の印象を数多く蓄積すれば、京都の観光地についての印象も語れるようになるし、表情や口調のデータを蓄積すれば、人の感情理解だって可能になると思うよ。

生徒Ｄ　うん、人の笑い声に反応して自らも笑うというロボットも開発されたし、本文にあるように人と雑談できるＡＩの研究も進んでいるから、やがて感情を理解して人と話ができるＡＩが出てくるかもね。

生徒Ｅ　気楽に話ができるＡＩ搭載のロボットは魅力だけど、本当に感情を理解できるようになるのかな。感情理解は人間同士だって難しいよ。それに、つらいときにロボットに慰めてもらっても、元気が出るかなあ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。〈　〉内は現代語訳である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「ぼくのは先生のとちょっと違うんですよ」と、いつも活発に発言してくれるS口君が言い出した。私の担当する日本古典文学演習でのことだ。そういうふうに反論してくれるのは嬉しいものである。なんといっても場が盛り上がる。みんなも興味を持ってくれる。私もファイトが湧く。もちろん自分の思い違いや誤りを訂正する機会にもなりうる。少なくとも、自分の考えを反対側から検討する絶好の機会とは言えるだろう。

その日取り上げたのは、蕪村（一七一六―八三）の

不二ひとつうづみ残して若葉かな（蕪村句集）

だった。*レポーターのK川さんはこの句について、

・不二（富士山）と若葉のどちらに重点が置かれているか。

という問題設定をした上で、

・若葉の旺盛さを主眼としつつ、富士山のすばらしさも詠まれている。

というふうに結論づけた。私も、そうだそうだと賛成し、

(1)「富士山っていうのは、この場合若葉のすばらしい繁茂力を祝福する、副次的な存在だよね。日本一高い富士山だけが残されているだけで、あとは緑に埋れているなんて、すごい生命力だ。今はちょうど若葉の季節だけど、目に痛いほどの濃い緑には時々圧倒されそうになるな～。」

などと、わりと調子に乗って喋ったと思う。そこに冒頭のS口君の発言があったのである。S口君の主張はこうだ。

(2)「ぼくがこの句を絵に描く場合、まず立派な富士山をドーンと据えたいと思うんです。そして、山の麓に緑を従えているというふうにしたい。日本一立派な富士山を讃えているっていうニュアンスは、この句からけっこう強く感じ取れるんですよね。」

そして、S口君に続いて実は自分もそう思うという意見が何人か出た。

ここでは右の点について、論点を整理しながら改めて考えてみたい。

句意について簡単にまとめ直しておく。「うづみ残して」とは、そこだけ埋めることができなくて、ということであり、句意は、富士山ただ一つのみを埋めることができなくて、あとはもう若葉一色の景色であることだ、となろう。季語は若葉、季節は初夏である。

では、富士、若葉、それぞれの存在の重みについて検討してみよう。

まず、富士についてである。たしかに、日本一の名峰富士山が出てきてしまうと、何物もかなわないという所はある。富士が出たら勝負は決まり、みたいな感覚は根強いのだ。そういう点では、なんといっても富士が重視されるべきであろう。

また「不二ひとつ」という印象的な始まりにも着目すべきだろう。「不二ひとつ」と言い切ってしまっているところに、ある強さが感じられて、心地よい。五七五の短詩形式にとって初句はかなり重要な位置にある。さらに蕪村には、富士山の絵を描いて、画面右上に次のように書き付けたものが残されている。

東海万公句
青天*八朶玉芙蓉
東成蕪邨句
不二ひとつうづみのこして若葉哉

夜半翁

「夜半翁」は蕪村のこと。「青天八朶玉芙蓉」は、『江陵集』という、「万公」こと万庵和尚（一六六六―一七三九）の詩集の一句である。「朶」は、花を数える量詞。「玉芙蓉」は美しい富士の意（万庵の号*は芙蓉軒）。万庵は江戸高輪東禅寺の僧侶で、服部南郭（一六八三―一七五九）という蕪村より少し前の時代を生きた著名な詩人の友人であり、彼自身も詩をよくした。蕪村がこの「不二ひとつ」の句を万庵の詩と対にしたことからも、自信作であったことが窺われる。

そして、富士が描かれていることから、蕪村がそれを重視していることが認められよう（描かれていないことから、むしろ若葉を重視するとの見方もありうるが、(3)水掛け論になってしまうので、これ以上深入りしない）。

さて次に、若葉を重視すべき根拠を列挙しよう。

やはり、季語であるという点は重く見られるべきだろう。若葉は和歌でも詠まれているが、しかし本格的に取り上げられるのは、俳諧においてである。芭蕉にも、

若葉して御目の雫拭はばや

〈目のさめるような若葉にかこまれておわす鑑真和尚の尊像よ、この清らかな若葉をもって御目のしずくを拭ってさしあげたいものだ。〉

あらたうと青葉若葉の日の光

〈ああ、なんと尊く感じられることよ。この青葉・若葉に降りそそぐ、さんさんたる日の光は。〉

などの名句があり、蕪村にも、

絶頂の城たのもしき若葉かな

〈みずみずしい若葉につつまれた山の頂上に城がそびえ立っている。その雄姿はまことに頼もしいかぎりだ。〉

という有名な句がある。「絶頂の城」のような若葉も生命力溢れる感じで力強い。

そして、切字「かな」によって修飾されているというのも重要である。さらに、次のような清水孝之*氏の、この句についての景観把握が参考になるだろう。

(4)これは斜め上空から見下した光景で、若葉をマッスとして把える視覚的な見方と受けとめれば、月並調どころか、「稲妻」の句とともに、極めて斬新な手法に成るといわねばなるまい。実情は、山麓の一部の光景から、この想像力による大景観を形象化したのだ（鑑賞日本古典文学『蕪村・一茶』）。

「マッス」とは塊のこと。「月並調」とは平凡で新しみのない表現との意。「稲妻」の句とは、「稲妻や波もて結へる秋津島（稲妻が明滅するたびに、白い波*が垣根を結んだような秋津島大和の国が見える）」という、やはり日本を上空から見下したような大観の作である。

清水氏が主張しているのは、若葉があたり一帯を蔽っているなか、富士山だけがぽつんと見えているというような光景なのだ。この景観把握に私も同感したいが、そうしてみると、若葉のすばらしさへの賞美はやはり重く見られるべきではないか（そのようにぽつんと頂上だけ姿を現すことで、かえって富士山の高さが認識されるという感じ方もあるかもしれない。そうなるともうこれは個人の感じ方に還元される問題だと言

わざるをえないだろう）。

ところで、ここまで富士と若葉の二項対立にばかりつい拘泥してしまったが、じつは一句の眼目は「うづみ残して」という表現にあるのではないか。正岡子規は『蕪村句集講義』で、

「うづみ残して」といふのは多少理窟くさい形容で、一面若葉になつたことを言ひ現すために、富士ばかりが埋められないといふのは、余程月並臭いところがある。（中略）兎に角厭味のある句である。

と、ずいぶん辛口の批評をしている。しかし子規も「うづみ残して」ということばが気になったのだとは言える。若葉が富士を「うづみ残す」という機知を、「理窟くさい形容」で「厭味」があるとするか、そうではなく、気のきいた理知的な捉え方とするかは、人によって判断の分かれるところだが、私は後者を取りたい。子規も月並調俳諧を攻撃するための手段として舌鋒がはげしくなったという部分もあるのではないか。そして、もし後者とするならば、やはり「うづみ残して」の主語である若葉の重要性がここで立ち現れてくるのではないか。

個人的なイメージとしてはこんな感じである。鳥になって真青な空を悠々と飛んでいる。駿河沖から浜辺へと飛び、いつのまにか富士を見下せる所まで来ていた。(5)富士山だけ残して、あとはすべて若葉若葉……。緑の絨毯の上に舞い降りて身を横たえたならどれほど気持ちいいだろうと思いながら、初夏の風に軽く吹き流されていくのだ。

（鈴木健一「古典詩歌入門」による）

〔注〕レポーター――調べて報告する人。
八朶――富士山頂の火口部分を花びらが開いた花にたとえたもの。
蕪邨――蕪村。
号――画家などが本名とは別に用いる名。
清水孝之――国文学者。
白い波が垣根を結んだような――白波で縁どられたように見えること。
拘泥――こだわること。

〔問1〕(1)富士山っていうのは、この場合若葉のすばらしい繁茂力を祝福する、副次的な存在だよね。とあるが、「副次的な存在」とは、ここではどのようなことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア　富士山は本来単独で俳句の主題となるべき素材だが、この蕪村の句では周囲の若葉を含めた遠景全体を整える添え物になってしまっているということ。

イ　一般的に富士山は作品の中心的な素材となることが多いが、この蕪村の句においては生き生きとした若葉を引き立てる役回りにすぎないということ。

ウ　富士山の大きさや力強さは言うまでもないが、この蕪村の句の一面が若葉で埋め尽くされているという広大な様子には見劣りしてしまうということ。

エ　日本一の高さを誇る名峰富士山ではあるが、この蕪村の句においては芽吹いた若葉の濃い緑がまぶしい、初夏の景色の魅力にはかなわないということ。

〔問2〕(2) ぼくがこの句を絵に描く場合、まず立派な富士山をドーンと据えたいと思うんです。とあるが、筆者は「この句」において、こうした気持ちになるのにふさわしい点を指摘している。そのことを述べている最も適切な一文を探し、最初と最後の**五字**を抜き出せ。なお、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問3〕(3) 水掛け論になってしまう とあるが、ここではどのようなことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 描かれているから重要だと主張しても、描かれていないものは軽視してよいとは断言できず、描写にこだわっていては本質の見えない議論になるということ。

イ 描かれているものは重要だという主張と、描かれていないものこそ重要だという主張の両方がともに本質をついており、一方には決められない議論になるということ。

ウ 描かれているのだから重要なのだという主張と、描かれていないからむしろ重要だとする主張がともに譲らず、いつまでも決着のつかない議論になるということ。

エ 描かれているか描かれていないかという表面的なことにこだわるあまり、お互いに相手の言葉尻をとらえて批判し合う、中身のない議論になるということ。

〔問4〕(4) これは斜め上空から見下した光景で、若葉をマッスとして把(とら)える視覚的な見方と受けとめれば、月並調どころか、「稲妻」の句とともに、極めて斬新な手法に成るといわねばなるまい。とあるが、「極めて斬新な手法」とは、ここではどのようなことか。その説明として、最も適切なものを次のうちより選べ。

ア 対象物一つ一つの詳細な部分に注目せず、高い場所から全体を大きな塊として捉えることで、力強い景観の描写に成功しているということ。

イ 目の前の対象物をありのままに表現するのではなく、架空の視点から全体を想像して捉えることで、雄大な景観を描写しているということ。

ウ 実際には小さな対象物であっても、それが無数に集まっている姿を考えて描写することで、全体を規模の大きな景観として見せているということ。

エ 直観した対象物そのものの姿ではなく、上から全体を眺めた姿を想像して描写することで、広がりのある景観の表現を可能にしているということ。

〔問5〕(5) 富士山だけ残して、あとはすべて若葉若葉……。とあるが、「若葉若葉……」という表現が具体的に表しているものを、本文中より**六字**で抜き出せ。

5
青

国

悟